

勝手に判断したようにも思いますが、とにかく軍医に診てもらおうことにし、便所にいって脱肛の出たままで診療所に行きました。軍医に見せたら、ちょうどこの折ソ連の女医がいて、「おお、ゲモロイ」と言って早くしまえと手まねで指図され、名前を聞かれてロシア語で書いた紙を渡され、三月十二日の横に私の名前を記入したので、日は良くおぼえています。病院に着くと、瘦せて仕事ができない今にも死にそうな者が多数いて、初老の男に「よかつたな、東京ダモイだ」と聞かされた時は、天にも昇るほどうれしかったものです。

話によると、タイシエツト地区はあと一年抑留生活が残っているが、あと一年の重労働に耐えられない者、使いものにならない者をソ連の女医が診察して死なないうちに日本に帰すのだということで、ソ連の女医は二百六十キロメートルの収容所まで使いものにならない者たちを集めに行ったので、あと二十日ほどかかるだろうということでした。さすれば俺は何と運が良い男よと自認しました。またしても、終戦の日の事

件と同じく、今度は先祖の血だらけの亡霊に助けられたこととなり、あの時変な夢を見ることもなくそのまま過ごしていたら、あと一年の労働に耐えられたかは自信がありません。おそらく大切な血をシベリアの大地に流し続けた後、自身もシベリアの土となったと思えます。「ダモイ」は五月一日の「メーデー」の祭典に参加させられた後でしたので、五月二日に「東京ダモイ」の列車に乗り、死のタイシエツトを後にし、心うきうき一路帰国となりました。

## シベリア抑留記

滋賀県 松岡 藤太郎

### 入 隊

昭和十六年二月二十三日、現役兵として寧安陸軍病院衛生要員として歩兵第三五連隊に入営。同二月二十四日、大阪港出発。同三月四日、牡丹江省寧安県樺林着、第九中隊に編入され軍人としての基礎教育を終

え、同五月三十日、牡丹江第一陸軍病院に派遣され衛生兵としての教育期間途中、同七月二十八日、臨時編成下令により第九師団衛生隊に配属され、部隊本部事務室勤務を命ぜられ動員事務の手伝いをしていました。

昭和十七年十一月二十日、寧安陸軍病院編成要員として転属を命ぜられ、以後、各病室及び薬室並びに部隊付衛生兵の教育を三回にわたり助手、助教を経て最後に庶務科付となり、診療科の週番下士官として平常勤務をしていました。

#### ソ連軍侵攻

昭和二十年八月八日午後十時頃に突然爆撃音が長時間にわたってするので、演習にしてはどうもおかしいと思い、隣の部隊へ電話で問い合わせたところ、「週番士官が何の連絡も受けていないので、演習でもしているのではないか」との返事でした。しかしどうもただごとではないと思い、連絡を待ちましたが、何事もなく、就寝することもできず朝まで我慢をしました。朝のラジオで関東軍の軍歌が流れ、ニュースでソ連軍

の侵攻を知りました。

以後、慌ただしい日が続きました。早速入院患者の安全輸送を済ませ、部隊長の指示により書類を必要最小限度に整理し、他は全部病院のボイラー室で焼却してすべてを完了しました。他の部隊では爆薬、燃料等の爆破、ソ連軍の侵攻を少しでも遅らせるため要所の橋は日本軍の南下後ごとく爆破、この時点で敗戦を直感しました。侵攻二日後の日没後、無蓋車に乗り込み寧安から東京城鏡泊湖へと向かい、船でペイコ島に到着、露営。食料も限りがあり、現地人から牛を買い求め、百五十人ほどいたと思いますが、一回食しただけで後は塩漬けにして保管しました。しかし二日後ソ連軍が侵攻してきて全部没収されました。ソ連軍の掌握下に入り、船に乗せられ下船地で武装解除。三八式歩兵銃が山積みされていたのを見ながら徒歩にて黙々と各地を移動、蘭崗に着きました。ここでは夜間、ソ連兵が拳銃、短刀を突き付け威嚇発射をしながらの略奪も数回受けました。

蘭崗を出発、途中日本軍の遺体が点々とあり、死臭

漂う中、円匙に三杯程度の土が被せられほとんど露出した遺体に手を合わせ、最後に掖河に到着しました。旧掖河陸軍病院で、残った病舎兵舎を利用して司令部、寧安、牡丹江第一陸軍病院の軍医、衛生兵によって病院を開設することになりました。傷つき倒れた者、病気で倒れた者、暑さと食料不足のため栄養失調等数多く運ばれてくるのですが、診療に必要な資材が不足して十分な手当てが施せないのが現状でしたので、毎日たくさん死亡者があり、多い日で四十人、少ない日で二十人に達していました。

もちろんソ連軍による拘束の身ですので何とも致し方がない上、軍医、衛生兵も発疹チフスに倒れ、診療する側の人員の不足等も重なっていましたのでやむを得ないとは思いますが、せめて死亡者の遺族に正確な病名、死亡年月日を生きている限り知らせる義務があると思ひ、各府県別に本籍地、病名、死亡年月日等整理をしていました。私の戦友にロシア語の通訳がいましたので、二人で、ソ連軍将校が入院患者数、死亡者数等を毎日聞きに来ますので話し相手をしていました

が、入院数が合致しないと銃殺するとおどかされる毎日でした。絶えず出入りのあることですので、調査時間が違いますと当然合致しないことを説明しても納得しませんでした。何とかよい方法はないかと考え、死亡者数、入院患者数（各室ごと）をグラフにして一見でわかるようにしましたところ、ソ連将校もこれはよいと気に入ったようでしたが、翌日突然「罷りならぬ」、また毎日整理していた死亡者名簿も「全部引き渡せ」とのこと。驚いて何とか一日猶予してもらい、府県別に手分けをして複製をし、一部をソ連軍に渡し一部は保管をしていましたが、最後にはこれも没収されてしまいました。このとき敗戦の惨めさを感じました。

この時点で掖河においての死亡者総数は八百人に達していました。昭和二十一年一月頃だったと思ひますが、慰霊祭を施行致しました。私が「殉国の霊」と墓碑に書いたのを記憶しています。遺体は全部ソ連軍医によって解剖に付され、後の処置は衛生兵が行い、旧掖河陸軍病院防空壕に埋葬されました。

疲労の上入浴できないのと、体を拭くにも水がなくシラミが発生、発疹チフスが多発し、ついに私も三十九度六分の高熱で入院することになりました。幸い私の場合軽症で三十日程度の入院で熱も下がり、廊下等歩けるほどに回復し三階の窓から下を見ましたら、埋葬されたはずの遺体を掘り出して積んでいるではありませんか。かちかちに凍った遺体をトラックに六十体ぐらい積んでソ連兵が運んでいるのを見ました。後で聞きましたら別の場所へ深い穴を掘って埋葬しているとの説明でしたが、酷寒期に穴を掘ることは不可能なこと、恐らく牡丹江の氷に穴を開け水葬されたのではないかと想像しています。同病室に入院していた同部隊の軍医が私の隣で亡くなり、また戦友二人を失いました。遺骨は保管されていましたが、ソ連軍により誰も持ち帰ることはできませんでした。

#### シベリア抑留地への旅

昭和二十一年三月上旬だったと思いますが、軍医二人、下士官十五人がソ連軍トラックに乗せられ牡丹江駅まで移送されました。噂ではシベリアで患者の治療

に当たるのではとのことでしたが、三十センチ角の窓一つしかない有蓋貨車に家畜並みの扱いで積み込まれ、外は何も見えない暗い車内で外から鍵を掛けられ、用便も停車時だけしか開けてくれない状態で、辛抱に辛抱を重ね着いたところはウオロシロフでした。雪が降っていて十五センチメートルぐらい積もっていました。橋の下に収容所があって、二百人ほどが既に収容されていました。大尉が出迎えてくれました。この大尉は収容所の世話をしていました。

一緒に来た軍医の二人はどこへ行かれたかはわかりません。私たちは既に収容されていた人たちに合流しました。この収容所の作業は、各事業所からの要請を受け人夫の繰り出しを大尉が面倒を見ておられるようでした。従って噂とは異なり、固定した仕事でなく雑役で、仕事が変わりました。道路工事、ソ連軍の事務所掃除、食料倉庫の積み込み作業、穀物の乾燥作業、倉庫の雑役、引き込み線の枕木の交換、砂糖工場の機械の清掃、馬鈴薯の植え込み作業等に従事させられました。このような仕事はノルマが達成できず、大

変苦勞させられました。

食料の支給も十分ではありませんでした。主食は粳で、野菜はキャベツの外の葉、肉は牛の頭、魚は鱈の頭を支給されました。主食の粳を玄米にするのには土臼を造り選別しなければなりません、不十分で粳混ざりの玄米を食べていました。少ない食料ですので一粒でも無駄にせず、歯で粳を剥ぎよく噛んで食べました。満腹感はありませんが、水を入れ炊き直して増量することで満腹感は得られます。しかし、栄養は取れませんし、大変危険ですので、少々の空腹には耐える習慣を心掛けました。また戦友にもそのように指導もしていました。

食料倉庫の作業の時は、白米、大豆、砂糖等が倉庫に積んでありますので、帰りに少しでも多く身体の手すべでの部分にわからないように隠し持ち、無事身体検査を通り抜けることに工夫をしていました。持ち帰った穀物は皆で分け、補充してました。引き込み線の枕木の交換等の作業の時は、トロッコに枕木を積んで外に出るのですから持ち出しには絶好の機会ですの

で、歩哨を納得させ、監督は地方人でしたので話をし、白米、大豆等多量に枕木の下に隠し、出口には番人がおりますが歩哨と監督がついていきますし余り吟味をしないので、無事通過することができました。現場に収容所がありましたので鍋を借り、かわりに白米、大豆を分け与え、互いに助け合ったこともありました。その日は作業もノルマを達成し、歩哨も監督も喜んでいきますし、我々も久し振りに満腹致しました。何としても体に気を付け無事祖国復帰を果たさなければならぬと元氣を取り戻しました。困ったことは散髪でした。二人で二百人以上を受け持っていましたので、順番が当たりませんでした。

このような毎日を過ごしていましたが、昭和二十二年五月頃、六人の者が歩哨に引率され徒歩にて約一時間、着いたところは炭坑でした。この収容所には約百十人ぐらい収容されていましたが、欠員の補充で、慣れない炭坑生活が始まりました。一日三交代にて、一組三十人がソ連人と同じ作業場で一緒にする仕事でした。作業服が支給され、入坑時にはヘルメットランプ

を受け取り、地下六百メートルのところに採炭現場があり、各々作業を担当しトロッコにて地上に運ぶ仕事でしたが、冬は暖かく夏は涼しくてよいのですが、大変危険な仕事で、気を付けなければならぬ毎日でした。一組が八時間労働で百五十トン地上に運び出すのが一日のノルマでしたが、停電とか坑内に事故がなければ容易に達成することができましたし、作業終了後は毎日シャワーを浴びることもでき、冬季は上質石炭を各人が一個ずつ持ち帰り収容所内で暖をとることもできました。また、給料も毎月百五十ルーブルを限度に支給され、パンやバター、砂糖等を手にすることもできました。

昭和二十三年七月末頃、帰国できるとのことで全員列車にて別の場所に移送されましたが、バラックの建物が並び、引き込み線があり木材が山積みされているところでした。八月から九月にかけて木材の貨車積みを完了次第帰国できるとのことでした。しかし、人の力とロープでの巻き上げによって貨車に積み込む作業ですから、これも危険ですし大変な仕事だと思いまし

た。暑い時期でしたので南京虫、蚊に悩まされ、外で寝たこともありました。幸いに仕事も順調に進み、一人の怪我人も出さず予定より早く完了することができました。

#### 帰 還

客車が入ってきて帰国の垂れ幕が張られ、いよいよ待望の日がやってきたと全員列車に乗り込みナホトカに到着。これという仕事はなく、休養をとり体力の回復を待って、昭和二十三年十一月十七日内地帰還のため栄豊丸に乗船、ナホトカ港を出発。同二十日舞鶴港上陸、同二十二日召集解除、翌二十三日帰宅を果たしました。

#### 帰国後の生活

家族が家業を守ってくれたので何の心配もなく直ちに農業に従事することができ、今年で五十年目になります。大きな発展のもと平和で住みよい環境での生活ができることに、今なお異国で眠っている幾多の戦友に思いを致し、ただただ感謝の日々を送っています。